

本山彦一蒐集考古資料に含まれる 後期旧石器時代資料について

渡 邊 貴 亮

はじめに

関西大学博物館に収蔵されている本山彦一蒐集考古資料（本山コレクション）には、蒐集当時には判明していなかった旧石器時代の資料が含まれている。いくつかの資料については既に紹介されているが（山口1981、渡邊2017）、ここでは新たに追加された資料を紹介する。

資料の紹介

①の資料は関西大学博物館においてMY-S0898として管理されている資料である。『本山考古室要録』によると「摂津国武庫郡甲東村甲山東北」で蒐集されたものとわかる。石器にも「兵庫県甲山」の朱書きと「甲山 大正二ノ三」の墨書が残されており、1913年3月に蒐集されたようである。裏面には本山コレクション中で稀に確認される資料管理札が残存しているが、判読は不可能である。甲東村は現在の兵庫県西宮市甲東園・仁川付近に1941年まで存続しており、この付近で蒐集されたものであろう。

本資料は後期旧石器時代後半期にみられる国府型ナイフ形石器である。長さ82mm、幅28mm、重量18.77gで先端を5mmほど欠く。

石核底面を大きく取り込んだ翼状剥片を素材とし、背面に先行する翼状剥片の剝離痕をわずかにとどめる。ブランディングにより打点を除去するとともに素材剥片の形を大きく変形している。ブランディングは概ね70°前後で腹面側から施されるが、後述するリダクション部には対向する調整が施される。

裏面先端部には使用による衝撃剝離痕をとどめており、先端部の欠損とそれによる石器の廃棄に繋がったものであろう。表面上部にも先端からの剝離痕をとどめており、この剝離痕の末端部を起点にブランディングの向きが変更される。側縁がやや内湾してくことから、リダクションを示唆するものであろう。

石材は肉眼観察では二上山北麓産のサヌカイトであり、器面の風化は進行しているが、新欠

部では黒色緻密な石質を観察できる。

②の資料はMY-S0745-8として管理されている資料の一点である。『本山考古室要録』には「石鏃四十四綴概算三千百余」とあるように多量の石鏃とともに保管されている。蒐集地については「東北地方」と記載されているが、現状では日本各地の石鏃が含まれているので、いつかの時点で東北地方以外の資料も一緒に管理されるようになっている。本資料についても詳細な蒐集地は不明である。

本資料は肉眼観察では二上山北麓産のサヌカイト製ナイフ形石器である。長さ39mm、幅26mm、重量5.65gで上半部を折損するが、おそらく二側縁加工の切り出し形を呈するもので後期旧石器時代後半期の所産であろう。不定型なやや縦長の剥片を素材とし、素材背面側から二次加工を施している。結果として石器表面に素材剥片のポジティブな面を、石器裏面にネガティブな面をもつ構成になっている。

折れ面付近に折損後の剝離痕が残されており、リダクションを試みたものの欠損が大きく諦めて廃棄した可能性もある。

③の資料はMY-S1017として管理されている資料の一点である。『本山考古室要録』によると「肥前国東彼杵郡川棚村新ヶ谷」で蒐集され「橋口氏」による寄贈と記載されている。この人物について旧稿では橋口良吉氏の可能性を指摘したが、いまだに確証は得られていない（渡邊2020）。石器の裏面には「肥前 内田付近」と朱書きされており、現在でも長崎県東彼杵郡川棚町の地名が残っているため、この付近で蒐集されたものであるとわかる。

本資料は長さ107mm、幅58mm、重量147.12gの削器である。石材は黒色緻密な安山岩であるが、風化の進行した器面は灰白色を呈し、表面には微細な凹凸が生じている。

石器としては、石核底面を取り込んだ素材剥片の末端部を機能部として、背面側から腹面側への二次加工によって削器として加工されてい

る。大きさ、裏面の剥離痕を考慮すると石核転用の可能性が高い。後述する剥片剥離技術と合わせて評価すれば、後期旧石器時代後半期のものであろう。

剥片剥離技術としては、石核上に剥離面打面を作出し、横長剥片を連続的に剥離している。打点が打面上を左右に移動しながら連続して剥片剥離をおこなうため、作業面は一定ではない。背面中央付近に残された剥離痕では貝殻状剥片が剥離されているが、おそらく意図したものではない。先行する二枚の剥離痕の稜線を取り込む形で大形の剥片を得ようとしたものの失敗し、その後に左側の剥離痕の打面と主要剥離面の打面がなす山形の稜線を鋭角に打撃して、それまでの剥離痕をすべて取り込んだ大形の剥片を得ようとして失敗している。その後に素材となる剥片が剥離されている。

おわりに

本山コレクションの中には旧石器時代の資料が含まれている。詳細は別稿に譲るが、この他にも後期旧石器時代の資料を複数確認している。

海外留学にて旧石器時代の資料に触れて日本でもその可能性を模索した濱田耕作先生、その濱田先生と懇意にし、考古学会に多大な貢献を果たした本山彦一氏、濱田先生のもとで考古学

を学び本山コレクションの整理に携わり、旧石器時代の確認を求めて国府遺跡の再発掘調査や二上山総合調査を実施した末永雅雄先生の三者の多大な貢献の結果がこの資料群に結実している（山口2018、関西大学なにわ大阪研究センター2020）。

この三者が関わった本山コレクションに旧石器時代資料が含まれる意義は大きい。今日では、日本列島中に10,000ヶ所を超える旧石器時代遺跡が確認されており（日本旧石器学会2010）、これからも増加していく一方であろう。しかし、本山氏が資料を蒐集していた頃には、我が国に旧石器時代の遺跡や資料が残されている可能性をどれほどの人が信じていたであろうか。日本列島における旧石器時代の確認は、1946年の岩宿遺跡発見と1950年の同遺跡発掘調査を待たねばならない。また山内清男氏や鎌木義昌氏らの調査により、国府遺跡において旧石器時代の資料が確認されるのは1958年のことである。

本山コレクションが考古学史上重要な資料群であることに変わりはないが、今後は新たな視点からの再評価と活用が希求される。

紙幅の都合上引用文献一覧は割愛します。

文学研究科博士課程後期課程

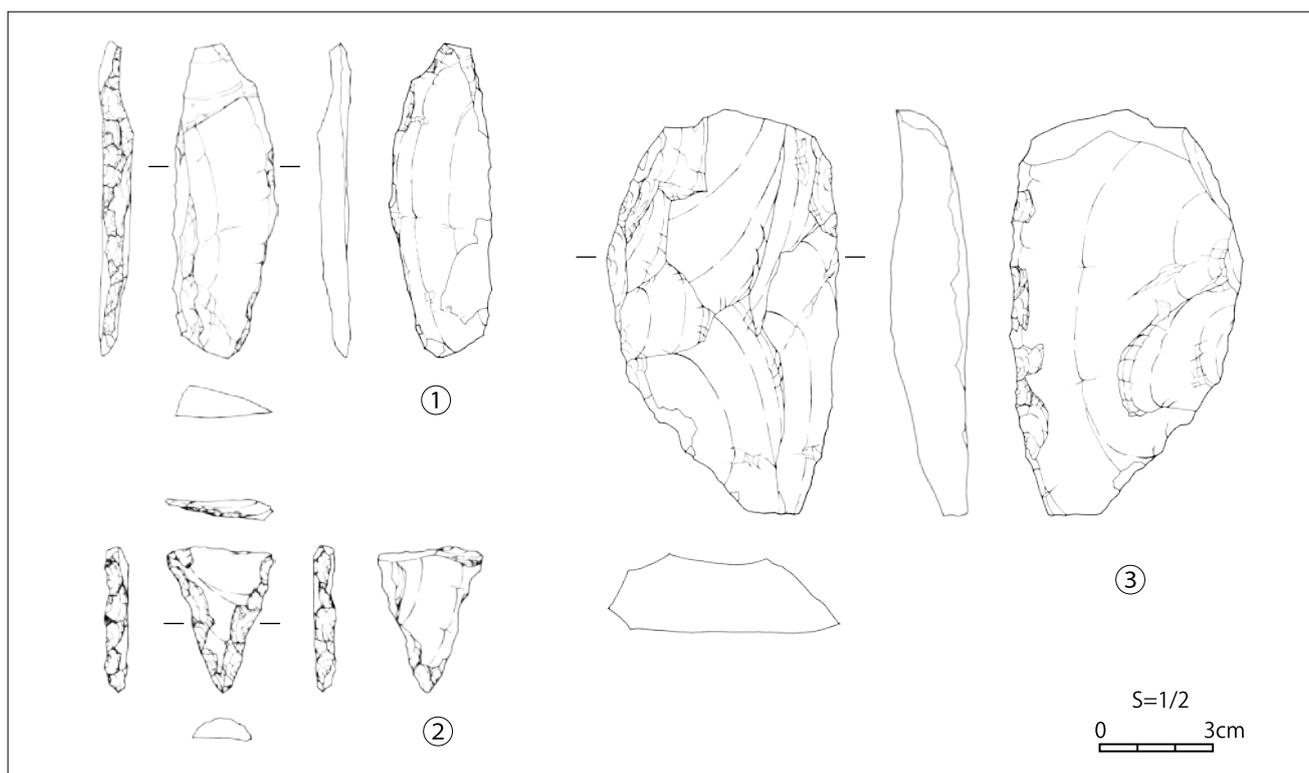


図 後期旧石器時代資料実測図